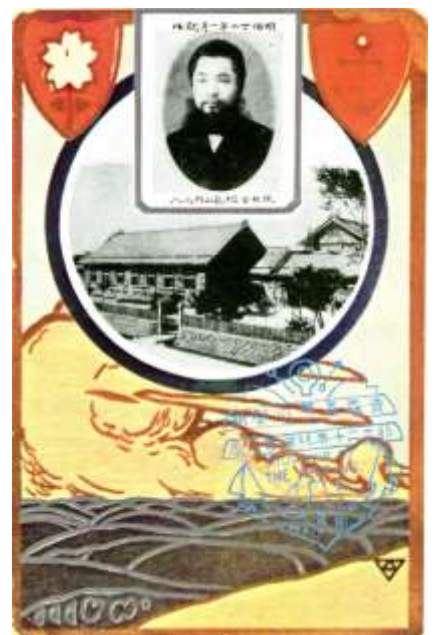


こんにちは。嘱託員の村上です。

先月行われたリオデジャネイロオリンピックでは、青森市ゆかりの選手が大活躍しましたね。特に卓球では青森山田高校を卒業した福原愛選手、水谷隼選手、丹羽孝希選手がメダルを獲得しました。そこで、今回は青森市における卓球の歴史についてお話ししたいと思います。

さて、卓球は明治時代半ばのイギリスで生まれたスポーツで、日本に伝わった時期については諸説ありますが、明治35年（1902）に東京高等師範学校（現筑波大学）の坪井玄道つぼいげんどうがヨーロッパを視察した際、卓球用具とルールブックを持ち帰ったことによって伝わったという説が有力です。そして、この翌年には青森市まで伝わっていたようです。

では、誰が青森市に卓球を伝えたのでしょうか。明治36年4月19日付の『東奥日報』には「新輸入の遊戯『ピンポン』』という記事が掲載されており、青森高等小学校（現浦町小学校）の山内元八校長が東京からお土産として卓球用具を持ち帰ったとあります。山内は自転車の普及や野球場の建設に関わるなど青森市のスポーツ振興に尽力した人物でした（詳しくは「あおもり歴史トリビア」第49号、第208号、第216号をご覧ください）。山内が持ち帰った卓球用具は青森高等小学校と新町女子尋常小学校に置くことになり、これを記念して新町女子尋常小学校では4月16日に式典を行いました。この式典では来賓に茶菓を振る舞ったそうです。



山内元八と
青森高等小学校校舎
（『目で見える青森の歴史』より）

さらに、明治36年12月8日付の『東奥日報』には「卓球会」という記事が掲載されていました。この記事によると、新町女子尋常小学校を会場に学校職員や一般の卓球愛好者を招いて第一びんぼんかい回卓球会が開催されたといえます。日本において卓球の統一ルールが定められるのは大正10年（1921）のことであり、この時の試合がどのような形式で行われていたのかはわかりませんが、青森市に卓球が伝わってから数か月で競技会が開かれていたというのは驚きですね。

そして、卓球は明治末期から大正期にかけて中学校や大学を中心に広まり、大正10年に大日本卓球協会が設立されると本格的に競技が行われるようになりました。昭和に入ると青森市からも全国大会で活躍する選手が現れるようになるのですが、それについては次の機会にご紹介することとしましょう。